

すみだ郷土文化資料館だより

MIYAKODORI

# みやこどり

みやこどり(ゆりかもめ)は、すみだを舞台にした和歌に登場するなど墨田区にゆかりのある鳥です。

第74号 2026年(令和8年)4月発行

すみだ  
郷土文化  
資料館  
SUMIDA  
HERITAGE  
MUSEUM



ふるさととの出会い、ときめきへの旅。

## すみだ郷土文化資料館

131-0033 東京都墨田区向島二丁目3番5号

☎(03)5619-7034 ☎(03)3625-3431

電話番号は正確に。

[https://www.city.sumida.lg.jp/sisetu\\_info/siryou/kyoudobunka/index.html](https://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kyoudobunka/index.html)

E-mail [sumida-htm@city.sumida.lg.jp](mailto:sumida-htm@city.sumida.lg.jp)

### ■開館時間

午前9:00～午後5:00 (入館は午後4:30まで)

### ■休館日

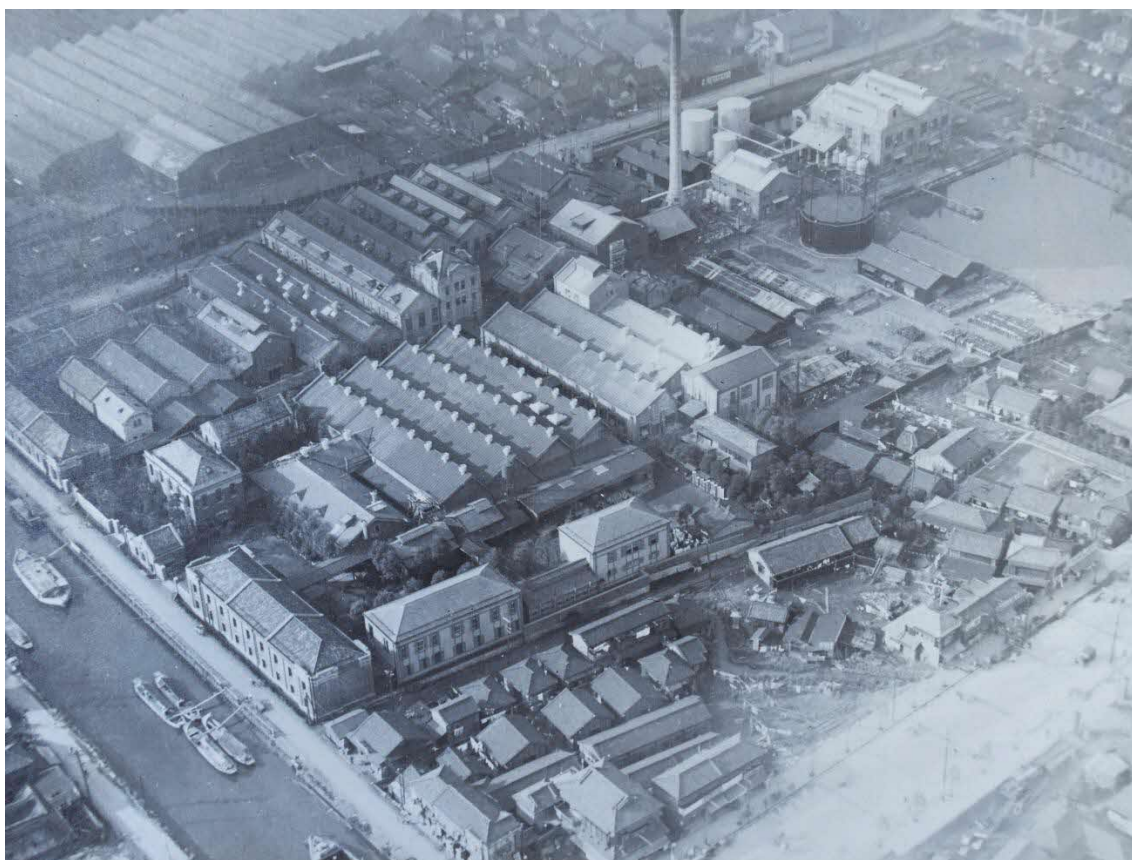
月曜日・第4火曜日(土・日・祝日は開館。

祝日に当たる時は翌平日休館)・

12月29日～1月2日

### ■観覧料

個人100円、団体(20人以上)1人80円、中学生以下と身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方及び介助の方1名は無料



1934(昭和9)年の花王株式会社長瀬商店東京工場(現・花王株式会社すみだ事業場)。所在地は変わらず、左下は北十間川。

企画展

## すみだの石鹼・歯磨き—石鹼工場のあるまち—

会期：令和8年5月16日(土)～令和8年6月28日(日)

現在も墨田区には石鹼の製造販売をする会社がありますが、明治時代から戦後にかけては、特に多くの工場が集中していました。

日本の近代化と様々な商品の国産化のニーズの中で、早期に国産化を実現した一つは石鹼でした。明治期にはだいたい今につながる会社が出そろい、それもあって明治後半には、一般の

人々にも石鹼は普及し、洗顔や入浴、洗濯などに使用するようになりました。

その後も、水害、関東大震災、戦争や空襲、景気の動向に影響を受けながらも、数社は現在まで残り、誰もが知る有名企業として、事業を続けています。

一方で、戦後になると、区内からの工場撤退や会社の倒産などで、地域との長い縁が途切れる企業もありました。

あるいは別の会社は、製造は別地域に譲り、本社や研究拠点として生まれ変わって、地域との縁をつないでいます。特に近年は、本社の区内外への移転もありました。

今回の展示を通じ、生活を支える日用品を作り続けてきた各企業の歴史と、すみだの工業地域としてのあゆみに思いを致していただければ幸いです。

## ■石鹼の普及まで

石鹼の日本への伝来は、戦国時代のポルトガル船によるといわれますが、当時は普及しませんでした。日本では、長らく、植物やあくなどを使って洗剤代わりにしていました。日本の近代化を経て再度日本に入ってきましたが、海外製品は高く、国産化することで、安価な商品が需要を満たす期待が高まりました。

しかし、明治初期は品質が安定せず、製造に苦勞が伴いました。現在であれば高等学校の化学の知識があれば原理は分かりますが、そうした知識も翻訳された文献や外国人との交流、試行錯誤を経て、技術を体得していくような時期でした。なお、以下、固有名詞以外の石鹼は石けん、歯磨き粉は歯磨き、固有名詞でも「石鹼」は「石鹼」と表記します。

## ■石けん国産化の軌跡

日本で初めて石けんの国産化に成功したのは、横浜にあった堤石鹼製造所でした。1873(明治6)年7月石けんを初出荷し、翌年には石けん製造所の開設と化粧石けんの製造を開始して、1890(明治23)年に営業を停止するまで製造を続けました。当初、洗濯屋向けに棒状洗濯石けんを1本10銭で発売したといえます。経営者の堤磯右衛門は、幕末の横須賀製鉄所(のちの横須賀海軍工廠)の建設工事に現場責任者として関わり、フランスの技術支援で作られていたために、フランス人との交流が生まれ、その中で石けんの効用を聞いたことが製造に至るきっかけと伝えられています。

## ■鳴春舎一石けんのまちすみだの原点一

横浜に続き、石けんの中心地となったのがすみだでした。鳴春舎は、旧徳島藩士・堀江小十郎が創設した石けん工場でした。東京府下葛飾郡中之郷村(現・墨田区向島・押上あたり)にありました。1876(明治9)年、輸入品の防止策として国産石けん製造を志した堀江は、堤石鹼製造所から村田分助を製造人として招いて技術を取り入れ、製造に着手します。1879(明治12)年には株式会社となり、1882(明治15)年には、中国やインドへの輸出も開始したとされます。しかし、石けん製造を商機とみた他社の参入で粗悪品も多く、それに伴う国産品への消費者の不信感もあり、事業は振るわず1884(明治17)年会社は

解散し、堀江小十郎の個人事業として細々と継続されました。堀江と石けん産業の縁は切れなかったようで、1890(明治23)年粗悪石けんの追放を掲げ、東京石鹼製造業組合が結成されると、堀江は初代の組合長に就任しています。

全盛期は決して長くなかった鳴春舎でしたが、現在の石けん製造会社につながる何人かの優れた人物を輩出します。

現在のライオン株式会社の創業者、小林富次郎は、1877(明治10)年入社すると、営業で才覚を発揮し、1879(明治12)～1884(明治17)年には支配人も務めました。

石けん製造者として、長瀬商店(現・花王株式会社)、丸見屋商店(のちのミツワ石鹼)、ライオン石鹼(現・ライオン株式会社)に関わることになる村田亀太郎は、新しい技術を次々実現し、日本の石けん製造業の発展に大きく寄与しました。村田は越前(現・福井県)三国町の飾り職人でしたが、東京で一流の飾り職人になることを目指して、1882(明治15)年に18歳で上京しました。しかし希望の職に就けず、たまたま鳴春舎に入社し、思いもかけず石けん製造に従事することとなりました。そこから、経験を積み重ね、勘を磨き、様々な工夫や努力を経て、石けんの安定生産、品質向上に尽力しました。

1889(明治22)年には、独立して村田工場を内藤新宿南町(現・新宿区新宿4丁目)に設け、石けん製造を開始しました。翌年、石けんが塩水に溶解しない性質を利用し、凝固を促す塩析法を完成しています。長瀬商店の花王石鹼は、当初、村田工場を専属工場として生産されました。その後、工場は現在の言問小学校南側に移転し、村田は長瀬商店直営工場の工場長を務めています。

その後、丸見屋商店が販売した「ミクニ浮石鹼」は、村田の海外視察と習得技術を元に共同で製造したものでした。また、村田が鳴春舎に入社した頃の支配人が小林富次郎であり、その縁から村田は、二代小林富次郎が合資会社ライオン石鹼工場を設立する際に、工場設備一式を現物出資しています。

資生堂石鹼の生産委託を受けていた若山太陽舎の若山初五郎も、村田の指導を受けたといえます。鳴春舎、そして関

わる人間の中でも特に村田亀太郎の存在が、石けんのまちすみだにとっては大きな意味を持ちます。

## ■すみだが石けんのまちになったわけ

それでは、なぜすみだが石けん工場が多数立地するまちになったのでしょうか。郷土史の本などには、皮革産業が盛んな地域であることが強く関係あるように書かれているものもあります。また一部の本には皮なめしの際に除かれる油脂が石けんの原料になったような記載をしているものもあります。確かに、1912(明治44)年頃、寺島には屠獣場じゅうじょうがあったことは地図でも確認できます。

一方、石けん製造を行った各社の社史では、原材料に関しては、特に初期は主に牛脂であり、国産は品質に難があり、輸入品を使っていたことが記されています。当時は原材料の状態が製品の品質の良し悪しに直結したようで、劣化したものは排除したことなどが記されています。その後、技術力の向上により、使用できる牛脂の幅は広がったようですが、社史には近郊から材料を入手できたというような記述は見られません。つまり、原材料を近くから仕入れやすいというのは、工場立地段階では少なくとも関係ないこととなります。また、皮なめしの皮は塩漬けにされており、そこから取り除いた油脂についても質と量共に原材料になるものではなかったと思われれます。現段階では石けん工場の立地と皮革産業や屠獣場の関係は見てきません。

それでは、なぜ石けん工場の集積地になったのか、ということの決め手となるような話は各社史にはありません。ただ、他の産業も含め、工業地としてのすみだのメリットである、大消費地である東京に隣接しており、広い土地を得やすく、運河等もあって材料輸送や出荷に便利ということはあったと思います。

## ■企業乱立から収益安定へ

1887(明治20)年前後、すみだは幕末の幕府の下級武士中心の住宅街から一転、工業地域となっていることは、ようやく整備された統計類で明らかです。その中でも基幹産業の一つが軽工業、特に石けん製造でした。一方で、企業が乱立し、粗悪品も出回って一時は国産石け

んへの信頼が大きく低下、その後は各社が競うことで最終的には国産化と品質向上が実現しますが、今度は商品の差別化が難しくなり、各社は利益の少なさに苦しむことになりました。そこで、多くの会社は、利益の大きな歯磨きの製造も行うようになりました。現在のライオン株式会社になる小林商店は石けん製造を止めて、歯磨き専業に舵を切ります。しかし、その後、小林富次郎と村田亀太郎の縁で、ライオン石鹸で石けん製造に再参入することになるのは、歴史の面白いところです。以下、各社のあゆみを紹介していきましょう。

#### ■資生堂(現・株式会社資生堂)のあゆみ

1872(明治5)年、西洋薬学を学び、海軍病院薬局長を勤めていた福原有信は、職を辞して、東京・銀座にわが国初の民間洋風調剤薬局として資生堂を創業しました。その後、処方薬以外に売薬もはじめ、1888(明治21)年に資生堂は日本初の練歯磨き「福原衛生歯磨石鹸」を発売しました。1916(大正5)年にはチューブ入り練歯磨き「福原衛生歯磨」も発売しています。この間、1897(明治30)年には、化粧品事業に進出し、以後化粧品を中心に事業を拡大していきました。1917(大正6)年に化粧石けん「花椿石鹸」を発売し、1921(大正10)年春には「資生堂石鹸」を発売しました。花椿石鹸が1個50銭だったのに対し、資生堂石鹸は1個15銭でした。従来の枠練りではなく機械練りを採用し、青磁色で、品質に優れながら安価と評判になりました。この2種類の石けんの製造は、1898(明治31)年創業で南葛飾郡寺島村にあった若山太陽舎が担いました。

その後、1926(大正15)年に資生堂と若山太陽舎の合同出資で資生堂石鹸株式会社が発足し、さらに1930(昭和5)年に株式会社資生堂は資生堂石鹸株式会社を吸収合併、同時に、化粧品と歯磨き製造を行っていた資生堂品川工場を移転併合させ、資生堂東京工場となりました。戦後、1959(昭和34)年に化粧品製造は大船(鎌倉)工場へ移り、石けん専門工場に戻りました。1983(昭和58)年8月31日閉鎖となるまで活動は続き、その後は自動化された久喜工場が石けん生産を担いました。同年9月から東京工場の解体が始まり、跡地は再開さ



資生堂オリーブ石鹸

れ、一部は曳舟文化センター(1987年開館)となっています。

資生堂の石けんで、戦後最初のヒット商品は1951(昭和26)年発売の「資生堂オリーブ石鹸」でした。肌にやさしい石けんをコンセプトに、イメージ戦略も意図し、オリーブ油を配合した製品だった。その後、様々な商品の名称と材料含有量の関係に社会的関心が集まり、1972(昭和47)年3月に生産を終了しています。続いて、1974(昭和49)11月「資生堂バスボン石鹸」が登場、多色多香調の明るいイメージでヒットしました。その後、植物原料を求める消費者に合わせ、1991(平成3)年「資生堂石鹸サポンドール」が発売されました。

資生堂工場とすみだの縁深いエピソードとしては、山田洋次監督の第2作目「下町の太陽」の舞台として、工場や向島がロケ地になったことがあります。倍賞千恵子が主演、相手役を勝呂誉が演じました。1963(昭和38)年4月18日に封切られた映画で、「美生堂」の工場として登場し、バレーボールのシーンでは東京工場バレー部のメンバーもエキストラとして参加したと伝わります。

#### ■長瀬商店(現・花王株式会社)のあゆみ

1887(明治20)年、長瀬富郎が日本橋区馬喰町に洋小間物店として長瀬商店を創業しました。1890(明治23)年、長瀬は、前出の村田亀太郎と薬剤師の瀬戸末吉の協力を得て、「花王石鹸」を発売します。当初は新宿の村田工場を専属工場としますが、工場は1896(明治29)年に向島須崎町に移転します。1902(明治35)年には、直営の請地工場を設

け、長瀬商店の生産製品製造の全てが同工場に統合され、石けんのほか歯磨き、化粧水などが生産されました。この間国内外の博覧会で受賞を重ねるなどして、名を高めました。1911(明治44)年、改組により、合資会社長瀬商会となり、さらに、1925(大正14)年には株式会社会社に改組し、花王石鹸株式会社長瀬商会となります。この間、請地工場では施設の拡充が進められましたが、新工場の建設が計画され、1922(大正11)年吾嬬町工場が完成し、翌年8月に移転を完了します。ところが、本格操業直後に関東大震災で被災。工場の一部が倒壊するも、1924(大正13)年には新たにグリセリン精製工場が竣工し、当時、日本最大規模の石けん工場に発展しました。さらに、空襲の被害も受けながら、吾嬬町工場は復興と発展をくり返し、戦後は花王株式会社東京工場となり、同じ場所に存在し続け、現在は花王株式会社すみだ事業場となっています。

なお、請地工場跡は隣接の伊藤染工場に譲渡され、戦時下の経営統合で、東洋紡向島工場となりました。その跡地は現在、都営文花一丁目住宅となっています。

#### ■小林富次郎商店(現・ライオン株式会社)のあゆみ

1891(明治24)年4月、元鳴春舎支配人だった小林富次郎は、その後の紆余曲折を経て、本所区小泉町にあった甥・小林与助の石けん工場の一隅に石けん・マッチの取次販売店を創業しました。売れ行きは順調で店が手狭となり、同年10月神田柳原河岸に移転します。現在のライオン株式会社はこの神田移転時を創業としています。1893(明治26)年、与助の石けん工場を小石川に移転させ、「高評石鹸」などの製造・販売を開始。さらに歯磨き製造に着目し、1896(明治29)年4月、村田亀太郎が「花王石鹸」や「寿考散歯磨」を製造していた旧工場を新宿工場として購入し、7月「獅子印ライオン歯磨」を製造・発売しました。今年(1997)はライオン歯磨の発売130年になります。翌1897(明治30)年5月さらに小石川の新工場に移転しています。

1910(明治43)年、初代の希望を引継ぎ、二代小林富次郎は、村田亀太郎との共同出資で、合資会社ライオン石鹸工場

を設立し、村田は工場設備一式を現物出資しています。1918(大正7)年には小林商店を、翌年にはライオン石鹸を株式会社に改組します。この間小林商店は、1915(大正4)年に小石川工場を火災により失ったことから、翌年に厩橋のたもとに工場と神田柳原河岸の本店店舗を合わせて、移転してきました。1923(大正12)年の関東大震災、1945(昭和20)年3月10日の空襲被害を共に受けますが、復興を果たします。1940(昭和15)年にライオン石鹸はライオン油脂株式会社に、1949(昭和24)年小林商店はライオン歯磨株式会社に社名を変更しています。その後両社は提携を強め、1980(昭和55)年合併し、現在のライオン株式会社となります。合併後は、厩橋のランドマークでもあった本社ビルを拠点にしていたましたが、2023(令和5)年に蔵前に移転し、4月にグランドオープンを迎えました。現在、厩橋の日本社跡地は再開発が進められています。

#### ■芳誠舎(現・玉の肌株式会社)

岐阜県出身の保々誠次郎は、明治の初めに上京し、向島の一洗舎という石けん工場で製造の技術を習得したとされます。1892(明治25)年、独立と同時に本所区緑町に個人経営の石けん工場、芳誠舎を設立し、「菊桐石鹸」や「羽車石鹸」などの商品を製造・販売しました。また、各社の委託製造も請け負いました。その代表が丸見屋商店の委託で製造した「ミツワ石鹸」です。1917(大正6)年10月、化学工業博覧会のために書



玉の肌石鹸

かれた「ミツワ石鹸解説書」には、工場の位置が「緑町4丁目23、49、51番地」とあり、芳誠舎の場所が記されています。1913(大正2)年には、自社の看板商品「玉の肌石鹸」を発売しました。

戦後、1960(昭和35)年に、社名を玉の肌石鹸株式会社と改称しました。1986(昭和61)年には、ミヨシ油脂株式会社と共同出資でミヨシ株式会社を設立し、販売部門を独立させています。さらに、2024(令和6)年には、社名を玉の肌株式会社と改めました。玉の肌は創業以来、同じ場所で現在まで130年以上操業してきた企業です。

なお、ミヨシ株式会社を共同出資した、ミヨシ油脂株式会社は、1920(大正10)年設立のミヨシ石鹸工業合資会社に始まります。2025(令和7)年1月27日、本社を創業地の葛飾区から錦糸町のオアシスタワーに移転しています。ミヨシ油脂株式会社は、1996(平成8)年石けん事業を分社化し、ミヨシ石鹸製造株式会社を設立。2003(平成15)年ミヨシ石鹸製造株式会社とミヨシ株式会社が合併し、ミヨシ石鹸株式会社となりました。その後、2016(平成28)年に玉の肌石鹸とミヨシ油脂の合併を解消し、ミヨシ石鹸が玉の肌石鹸の完全子会社となって現在に至ります。玉の肌とミヨシ石鹸は同じ場所に本社を置いています。

#### ■丸見屋商店(ミツワ石鹸株式会社)

幕末の1860(万延元)年に三輪善兵衛が開業した小間物問屋が丸見屋商店です。1907(明治40)年石けん製造に乗り出し、三輪は村田亀太郎と組んで「ミクニ浮石鹸」を発売しますが、この広告の字句が問題となり、東京小間物化粧品卸商組合の会長であった長瀬富郎と三輪善兵衛の間に不和が生じました。間もなく円満解決しますが、村田亀太郎は大きなダメージを負い、丸見屋とはたも

とを分かって、旧知の初代小林富次郎が支援することになりました。一方、丸見屋ではその後本格的に石けんの製造・販売に乗り出し、1910(明治43)年芳誠舎に製造を委託して「ミツワ石鹸」の販売を始めました。1920(大正9)年には、向島に自社工場を構え、石けんの自社製造はもちろん、歯磨き、家庭薬、栄養剤、化粧品、グリセリン、合成香料などさまざまな製品を生産しました。向島工場は、1945(昭和20)年空襲により甚大な被害を受けますが、戦後復興し、生産を続けました。

1950(昭和25)年には、株式会社丸見屋に改組し、1964(昭和39)年には、ミツワ石鹸株式会社と改称します。主力商品の「ミツワ石鹸」を軸に、「ソフト石鹸」など新たな商品も展開し、CMも広く知られました。しかし、1975(昭和50)年に商標と富士工場をP&Gに売却し、その後倒産しました。向島工場も解体され、跡地には都営団地や墨田特別支援学校ができて、今日に至っています。製品の中で、薬用石鹸「ミュージ」のブランドは他社に引き継がれ、現在でも流通しています。



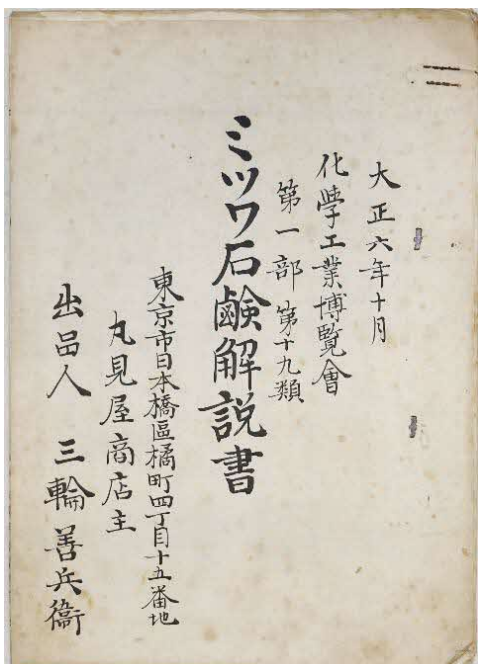
ミツワ石鹸

#### ■石けんのまちすみだの研究は道半ば

このようにすみだに大手の工場が集中し、しのぎを削り、現在は玉の肌と花王以外は姿を消したすみだの石けん工場ですが、まだまだ調査研究は不足しています。例えば、今回初めて公開する、1891(明治24)年に創業し、一時はライオンや花王と肩を並べながら、後継者がおらず廃業した、井村整興社の資料は、整理が始まったばかり、ミツワ石鹸資料もまだまだ整理できていない資料が多くあります。

今回は、あくまで途中経過です。今も石けん工場のあるまちに、思いをはせていただくと幸いです。

(学芸員 石橋 星志)



ミツワ石鹸解説書